

東京都行政の中にこういう素晴らしい人がいたことを知り、強く共感！

森枝敏郎 くまもと福祉のラウンドテーブル代表幹事
(元熊本県健康福祉部長)

今回の講師のお話はそれぞれ面白かったですが、中でも有留武司さんの話に対して強い共感を覚えたので、有留さんの話について感想を述べたい。

○東京都行政に対して持っていたイメージ&参考にした点

私が東京都政を意識したことの初めは、高校・大学時代で美濃部都政の誕生が大きく報道された時代だった。

公営ギャンブル廃止や老人医療費無料化などの報道に接し、従来の政治と違って「市民が主役」という印象と期待を持っていた。

熊本県行政マンとなって以降、特に、施策立案をする立場とか、地方分権・地方主権を考える時代になると、東京都の自主財源比率の高さを羨ましく思っていた。

政策面では、「認証保育園」「ホームレス支援」、或いは「健康長寿医療センター」等、東京都で先駆的に実施されていた政策を羨ましくもあったが、熊本県の状況に合わせながら組み立てたこともある。

○私の「戦い」の実践例に対する感想～森枝個人の経験を踏まえて～

レジュメにも「戦い」という言葉が書いてあるが、城北福祉センター時代からの「戦い」の話は非常に面白かったし、こういう人がおられたことを知り大変嬉しかった。

「しかし抵抗勢力との戦いは厳しい」「財政当局（財政局）は大反対」という言葉には、同様の体験をした者の一人として、「そうそう」という気持ちで聴いていた。

私自身のことを振り返ってみると、初めて「抵抗勢力？」に遭遇したのは、阿蘇郡小国町役場に派遣され、(私も35才と若かったが)若い町長(当時43歳)の支援を受けながら若手職員、若手住民と連携し、小国杉を活用した地域デザインづくり、地域資源を活用した特産品づくりなど、当時としては革新的

なまちづくりを展開しつつあった頃である。

その後、水俣再生の企画・調整（一部実施）を担当していた水俣振興推進室で、水俣病（問題）に正面から向き合い、水俣病犠牲者慰霊式を始めようとしたときや水俣病原点の地という思いで水俣湾埋立地整備計画を策定したときなど、県庁内外からの異論や無言の抵抗を受けたこともある。

健康福祉部時代では、「地域の縁がわづくり」などの新規施策構築、ホームレス支援をはじめとする「生活困窮者対策」の拡充、「障がい者差別をなくす条例」制定の推進等の場合に、話の聞き流しなど無言の抵抗、できない理由の並べ立て、決定後は意識したスローな対応、骨抜きにしていくなどに遭遇した。

私自身、当事者や現場を重視しながら政策立案・推進・実施をしていくことがワークスタイルであり、また人生哲学でもあるので、有留さんと似た感じがあったと思う。

話は変わるが、お話の中にあった「山谷」は、学生時代に岡林信康が歌っていた「山谷ブルース」以来、頭の片隅にあり、健康福祉部時代に足を運びたかったが出来ずにいた。

昨年6月に初めて大阪の「あいりん地区」に足を運び学んだことに続き、本年5月になってようやく「山谷地区」に足を運ぶことができた。

内心どつきりしながら、一人で「いろは商店街」に足を運び、飛び込みで入った相談・支援事務所や隣接の訪問看護ステーションの方に案内して頂きドヤも見学できた。

その経験があったので、有留さんの話は、「そうだったのか」という感じで、実感を持って聴くことができた。

東京都の場合は、全国に注視され、また都民の権利意識が強いなどの状況もあると思われるが、そういう環境の中で色々やられてきたことは凄いなと思う。

敬服するのみです。素晴らしい話をありがとうございました。